

源氏物語の悪しき役向きの人々

沢田正子

一

源氏物語には多くの登場人物が造型されているが、主人公光源氏をはじめ主要人物たちは、男女を問わず概ね平安貴人の名に恥じない雅な教養人たちである。仏道を重んじ、見識、品性等それぞれ整った人々であり、少なくとも極めて悪しき世評など受ける趣ではない。

一方、脇役、端役たちのなかにはいわゆる悪役と呼ばれる人々も活躍し、物語の進展に多々寄与している。弘徽殿太后や式部卿宮の大北の方などはその代表例であるが、悪の役向きはそうした傍役たちにすべてが任されていて、主要人物たちは全く手を汚すことはないのか、といえは必ずしもそうではない。一見、温厚な、人間性ゆたかな、貴人の鏡のような主要人物たちのなかにも、その心内においては、諸々の好ましからざる悪しき病巣の芽が育まれていることも稀ではない。そもそも一夫多妻が許されていた時代とはいえ、次々と女君たちとの物語を繰り広げてゆく光源氏自身も善良なる人物などとは言えないかも知れない。「悪き御心浅さなめりかし」〈空蝉・一一六〉等と草子地などで酷評される折も多々あり、まさに仏罰ものである⁽¹⁾。また、淑女の鏡のような女君たちにもふとそれらしからぬ言動がほの見える場合もあり⁽²⁾、逆にそこにごく自然態の人間らしさが看取される所以でもあらう。

物語のなかには、いわゆる悪しき役割を演ずる人々とともに、また一方で理想人、善き人々のなかにも悪役めいた挙動、言動が綻び見え、草子地や他の登場人物たちの視線を介して批難される場合も少なくない。さらにそうした批判の対象にされることはなくとも、心意的に罪深き役向きを演じている場合も多く、そうした善悪、陰陽両様の人間模様によつて、物語世界が絵空事ではない趣で重層的に彩色されることにもなる。

孝標女の夢見た雅な物語世界には一見相容れない感も否めない、いわゆる悪役たちの動向に注目し、ことに悪役専任とも言える傍役たちの他に、よき人々のなかにも課せられている負の任の行く方を辿ることは、人間の罪や業の問題とも深く連動し、物語の本質をよりたしかに解明する糸口になるかも知れない。ここでは右のような観点より源氏物語に多彩に躍動する諸々の罪ある役向きについて若干の考察を試みたいと思う。

二

まずはじめは文字通りの悪役として設定されている人々である。物語の初巻、桐壺巻には帝と更衣の悲恋物語に不即不離の形で周囲の人々、ことに皇妃たちの嫉妬、羨望、憎悪、怨念等が續々綴

られているが、その急先鋒であり、個的言及がなされているのが弘徽殿女御である。それは更衣の存命中に限らず、没後にまでその悪役ぶりが尾を引いているのが特徴である。たとえば悲嘆にくれて意気消沈する帝や、それをもて煩う人々の気配に対して、

「なき後まで、人の胸、あくまじかりける、人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほ、
ゆるしなう、の給ひける。〈桐壺・三三〉

とまさに死者に鞭打つ趣である。また、傷心の帝に当てつけるような言動も多々見られ、たとえば帝の命を受けて故人の里郎を見舞った朝負命婦から母北の方の、いたわしい状況が伝えられていたころ、

弘徽殿には、久しう、上の御局にも、参う上りたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞし給ふなる。「いと、すさまじう、物し」と、聞し召す。この頃の御気色を見たてまつる上人、女房などは、「かたはら痛し」と、聞きけり。いと、おしたち、かどくしきところ物し給ふ御方にて、ことにもあらず思し消ちて、もてなし給ふなるべし。〈同・四一〉

折しも晩秋の夜半、悲哀感もいやまさる帝を後目に、聞えよがしに賑々しい管絃の遊びに余念がなく、帝は不快感を禁じえない。側近たちはただ困惑するばかりであるが、更衣の生前は帝の偏愛ぶりに、「あいなく、目をそばめつゝ」〈同・二七〉冷視していた上人たちも、ここでは立場を逆転させている。いやそうせざるをえないほど弘徽殿の横暴ぶりは目に余るものがあつたのであろう。

「おしたち」「かどくし」等の性格設定もまさに悪役のそれであり、人の傷みを全く意に介さない強引な人となりが強調されている。この「おしたち」云々の性格づけは後の雲井雁や夕霧の六の君などにも窺われ、いわゆる悪役というわけでもないが、右大臣家の系統、あるいは、時流に乗った権門の家系の女君たちに負わされている性情である³⁾。

弘徽殿女御の強烈な個性は次に見える先帝の後の言葉にもよく尽くされている。亡き更衣に面影の通うという先帝の四の宮をという帝の内意が伝えられると、

母后、「あなおそろしや、春宮の女御の、いとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはに、はかなくもてなされし例も、ゆゝしう」と思しつゝみて、すがくしうも思したゝざりける程に、

〈同・四五〉

故更衣を圧迫したのはこの女御一人ではなく、かなりの人々との共同戦線の結果とも言えるが、母后には弘徽殿女御が悪の権化のように認識されている。わが娘が、次なる犠牲者にされかねない懸念もあり、なかなか承諾は得られなかつたのである。が、母后の死により藤壺の入内が実現すると、またまた女御の悪しき役割はくり返されてゆく。更衣の没後、一時は幼い源氏の愛らしさに「えさしはなち給はず」〈同・四三〉と態度をやや軟化せざるをえなかつたが、新参の藤壺と源氏の親睦を耳にすると、

弘徽殿の女御、又この宮とも、御中そばくしきゆゑ、うちそへて、もとよりのにくさも立ち出でゝ、物しと思したり。〈同・四七〉

と再び硬化の一途を辿ることになる。源氏と女御はいわゆる継母、継子の関係であるが、このいわゆる継子物語は前述のごく一瞬の氷解期を除いて以後延々と続いてゆくことになる。それが最も際

立つてくるのが源氏の須磨下向の折であるのは言うまでもない。

源氏の須磨退去の直接的引き金になったのが知られる朧月夜との一件であるが、夏の激しい雷雨の夜、右大臣邸での二人の密会が問題にされるに際して、弘徽殿太后に先立つてその父右大臣の性格設定も念押しされている。これまでも左大臣家に対する右大臣家の家風は、頭中将夫人の四の君の夕顔への圧迫劇をはじめ諸々窺われるが、ここでもそれが再確認されている。源氏と朧月夜の逢瀬を目撃した右大臣は激怒し、たまたま里下り中であった太后に綿々と訴える。その時の前置きを見ると、

大臣は、思ひのまゝに、こめたる所おはせぬ本性に、いとゞ、老いの御ひがみさへ添ひ給ひにければ、何事にかは、とゞこほり給はむ。ゆく／＼と、宮にも愁へ聞え給ふ。

〈賢木・四一一〉

と、生来の激した性情に老いのひがみも添加されている。方やそれを受け取る例の太后についても「宮は、いとゞしき御心なれば、いともしき御気色にて」〈同・四一二〉以下源氏への誹謗中傷を「すく／＼しうの給ひ続」〈同・四一三〉けるので、さすがの右大臣もなまじ言わなければよかったと自らの短慮を後悔するほどである。しかし時すでに遅く、太后の怒気は鎮まらず、この機を源氏追放の好機に活用すべく策謀をめぐらせてゆく。

かくて源氏は配所の人となるが、弘徽殿のこの種の任は都と辺地に別れてもさらに続行されてゆく。都人には源氏への同情票も多く、当初は消息文と共に漢詩文のやりとりなども頻繁であったが、太后は心中穏やかではない。

「おほやけの勤事なる人は、心にまかせて、この世のあちはひをだに、知る事難うこそあむなれ。おもしろき家居して、世の中を誹りもどきて。かの、鹿を馬と言ひけん人の、ひがめるやうに、追従する」など、あしきことゞも、きこえければ、「わづらはし」とて、たえて、消息きこえ給ふ人なし。〈須磨・四四〉

須磨から送られてくる源氏の詩文のめでたさが世の話題となるにつけても、太后は流罪の身の不謹慎ぶりを厳しくなじり、その結果、太后派の顔色を窺う人々からの文は途絶えてしまう。後日源氏の召還をめぐっても同様であり、父桐壺院の夢の告げに脅えて目を患い、体調不良に陥った朱雀帝は弟の赦免を意図するが、太后へのたびたびの要請も容れられなかった。

「世のもどき、軽／＼しきやうなるべし。罪に落ちて、宮こを去りし人を、三年をだに過ぐさず、許されん事は、世の人も、いかゞ言ひ伝へ侍らん」など、后、かたく諫め給ふに、おぼしはゞかる程に、〈明石・八〇〉

と、母后の発言権は絶大である。ことあるごとに悪しき継母ぶりを発揮して実子の朱雀帝さえも困惑させるが、重なる病と亡き父院への背信の重荷に堪え切れず、遂に帝も「后の御諫めをも背きて」〈同・八六〉源氏を召還することになる。恐らく若い帝にとっては初めてともいえる母后への反抗であつたらう。

かくて源氏は復活し以後順風満帆の航海を続け、太后のこの種の役割もひとまず終止符となるが、以降も悪役としての出番が全くないわけではない。その矛先は継子の源氏から実子の朱雀院にも向

けられてゆく。

乙女の巻の終盤近く、冷泉帝の朱雀院への行幸があり、帰り際に太后をも見舞っている。無論源氏も同行し、后も「待ち喜び給ひて」〈三一九〉対面し、老の涙を禁じえないが、盛大な供揃いで一行が去った後、

后は、胸うち騒ぎて、「いかに思し出づらん。世を保ち給ふべき御宿世は、消たれぬものにこそ」と、いにしへを悔い思す。〈同・三一九〉

今にして国の要としての源氏の宿世の高さを認めざるをえないが、ここで過去の罰状を後悔している太后には仏心の兆しも相応に窺われる一方で、次のようにある。

きさきは、おほやけに奏せさせ給ふ事ある時―ぞ、御たうばりの官、爵、なにくれのことじに触れつゝ、御心にかなはぬ時ぞ、「命ながくて、かゝる、世の末を見ること」と、とりかへさまほしう、よろづを思ひむつかりける。老いもておはするまゝに、さがなさも勝りて、院も、くらべ苦しう、堪へがたくぞ、思ひきこえ給ひける。〈同〉

従前、政務に口を挟みわが意を押し通して来たことが忘れられず、無念と老のひがみで生来の性悪さも加速し、朱雀院ももて煩うばかりである。その後、太后の言及は若葉巻で朱雀院の出家に際し、母后の存命中は憚られたがその障害もなくなつたので、という文脈に軽くふれられる程度であるが、悪の権化のごとき役向きの大后ではあるが、晩年はいわゆる老の涙も悔いもあり、扱いにくさはこの上ないものの、ある意味での老人特有のほほえましさ、どこかで憎み切れない感觸も否めないであろう。これは落窪物語の継母北の方の晩年などにも通うところであるが⁽⁴⁾とにかく過去の行状を「悔い思す」の一語の意は重いであろう。

三

一方、そうした晩年のいわゆる計し、救いの気配のかけらもないように造型されているのが、紫上の継母、兵部卿宮、後の式部卿宮の北の方である。源氏と弘徽殿との継子関係の確執が須磨からの帰洛をもつて比較的短期間に終るのに対して、これは若紫の巻以来第二部の世界まで延々と引き継がれてゆくことにその根の深さが窺われる。そもそもこの北の方が物語に初めて登場するのは若紫巻、北山僧都の言葉のなかである。北山の山中で出会った愛らしい少女の素性をゆかしむ源氏に、僧都は少女の母である自分の姪について次のように語っている。

いかなる人のしわざにか、兵部卿の宮なん、しのびて語らひつき結へりけるを、もとの北の方、やむごとくなどして、やすからぬ事多くて、明け暮れものを思ひてなむ、なくなり侍りにし。

「物思ひに、やまびづくもの」と、目に近く見給へし。〈若紫・一九〇〉

兵部卿宮の本妻の出自が高貴で勢力強大で、若紫の母を圧迫し、その死を早めたというのである。これは右大臣家の四の君に強迫されて転々と居を替え、身を隨っていた夕顔の場合にも符合するが、いずれの北の方も権門の出身に加えて、性情の激しさが特徴である。僧都は人は精神的疲労によって病づくといういわれを実体験したと言うが、それほど北の方の性格は強烈であつたことになる。

それゆえ、僧都の妹の尼君もまだ幼い孫娘を、父宮のもとに託すことに二の足を踏んでいたのである。尼君の没後、突然失踪した若紫を偲ぶ兵部卿宮は、「故尼君も、かしこに、わたり給はんことを、『いともし』と思したりしことなれば」〈同・二三一〉と、尼君の思いを付度した乳母たちが勝手に連れ出したのではないかと推測しているが、それほど北の方の存在は北山の人々にとって脅威であったわけである。一方、事情を知らされた継母の思いも複雑であった。

北の方も、はゞ君を「憎し」と思ひ聞え給ひける心も失せて、わが心に任せつべうおぼしけるに、違ひぬるは、口惜しう思しけり。〈同〉

若紫の生母が没したのは生後まもないころで、それからかなりの歳月が経過しているが、北の方の憎しみが消えたのはいつころなのであろうか。恐らく尼君亡き後、行く先をなくした少女を受け入れざるをえなくなった事由によるものであろうが、この人並みの仏心もあくまで假定法の段階のことであつて、実際に引き受けた場合、落窪物語ほどではないにしてもその種の不安が杞憂であるとも言ひ切れまい。そして今、せつかくの北の方の慈悲の発露が裏切られた成行に「口惜しう思しけり」の結びには、この無念が後々まで尾を引く無気味な気配も看取されよう。それは次の一文にも明らかである。

薨上亡き後、源氏の新妻となつた若紫の噂は世人の注目の的であり、「西の対の姫君の御さいはひ」〈賢木・三八〇〉が取沙汰されるなか、

父親王も、思ふさまに、きこえかはし給ふ。嫡腹の、「かぎりなく」とおぼすは、はかゞしうもえあらぬに、ねたげなる事多くて、まゝ母の北の方は、安からずおぼすべし。物語に、ことさらに、作り出でたるやうなる御有様なり。〈同〉

尼君の没後、寄り辺のない少女を手元に引き取つて…というあの情深い心はどこに行つてしまったのか、継娘の人も羨む幸運ぶりと実の娘の不振という、作り物語そのもののような皮肉な仕儀に北の方の胸中は決して穏やかではない。いやそれどころか煮えくり返つていたかも知れない。それでもここでは「安からずおぼすべし」と推測の体で比較的穏やかな筆の運びであるが、それがまさに北の方らしき激しさで露呈するのが、ほどなく訪れる源氏の須磨行きの際である。左大臣家の人々や女君たちとの別れの場面が綴られるなかに、紫上は父式部卿宮が世評を懼り音信も途絶えたことを、女房たちの手前も気恥ずかしく思うころ、

継母の北の方などの、「俄なりしさいはひの、あわたゞしさ。あなゆゝしや。おもふ人へ、かたがたにつけて、別れ給ふ人かな」との給ひけるを、さる便りありて、もり聞き給ふにも、いみじう心うければ、これよりも、絶えておとづれきこえ給はず。〈須磨・一九〉

と、北の方の悪口雑言が漏れ伝えられている。さきに比してここでは継母の言動が側近の女房などを介して紫上の耳に入っているのであり、継娘の突然の幸いとその崩壊に小気味よさを恣にする体である。その悪意に満ちた口吻にさすがの紫上も多大な不快感を禁じえず、父宮への音信も一切絶つてしまうことになる。「いみじう心うし」などと相手をひどく忌避する心情表現は、温順な淑女紫上にはあまりそぐわない感もあるが、向後も北の方の言動にはかなり過敏に反応してゆくことになる。それは遠く若菜巻の女三宮降嫁の折などに最も端的に認められよう。

前々からその噂を耳にしながらも微塵も源氏を疑わなかった紫上は、事実を知されても恨み言一つ漏らさなかったが、内奥の衝撃ははかり知れないものがあつた。世のもの笑いにならぬようせめて誇り高く身を処したいと願うなかに、再び北の方への思惑が手繰られてゆく。

「…式部卿の宮の大北の方、つねに、うけはしげなる事どもを、の給ひ出でつゝ、あぢきなき、大将の御事にてさへ、あやしく、恨みそねみ給ふなるを。かやうに聞きて、いかに、いちじるくおもひあはせ給はん」など、おいらかなる、人の御心といへど、いかでかは、かばかりの限はなからん。〈若葉上・二四〇〉

北の方は、常々自分のことを呪わしげに言い、先ごろは源氏の養女扱いの玉鬘と鬚黒との縁で、離別を余儀なくされた実の娘の不運に一人恨みを募らせているという、今回のことではさぞかし快哉を叫んでいることであろう、とその胸内を忖度しているが、これも高貴な女人としてはやや気の廻し過ぎの感も否めない。が、本来おおらか人ではあるが、やはり、それでも…との弁明が付されているのであり、日頃の北の方の言動ゆえに紫上もそうならざるをえないという口吻である。

この大北の方の役割が頂点を極めるのが、その玉鬘による娘の離別劇の際である。鬚黒の突然変異のような新妻、玉鬘への傾倒ぶりに、夫人の式部卿宮の大君は子女とともに実家に帰ることになるが、それを迎えた母である北の方の動揺は尋常ではない。

母北の方、なき騒ぎ給ひて、「おほきおとゝを、『めでたきすが』と、思ひ聞え給へれど、『いかばかりの、昔の仇、敵にかおはしけん』とこそ、思ほゆれ。女御をも、ことにふれ、はしたなくもてなし給ひしかど、それは、『御中の恨み解けざりし程、思ひ知れとにこそはありけめ』と、おぼしの給ひ、世の人もしひなししだに、なほ、さやはあるべき。『人ひとり』を、思ひかしづき給はむ故は、ほとりまでも匂ふ例こそあれ』と、心えざりしを、まして、かく、末に、すゝるなる継子かしづきをして、おのれふるし給へるいとほしみに、『実法なる人の、ゆき所あるまじきを』とて、とり寄せ、もてかづき給ふは、いかゞつらからぬ』と、いひ続け、のゝしり給へば、
〈真木柱・一三七〉

以前からの因縁もあり、紫上を妻としながら宮家を顧みない源氏に対する北の方の恨みつらみは恒常的ともいえるが、⁽¹⁵⁾ ことここに至つてはまさに忿懣やる方ない。夫の式部卿宮が、源氏に冷遇されながらも迎合するのも不愉快であり、まして玉鬘の養女扱いにより長女が離縁の憂き目をみたことに怒りは爆発する。源氏を口汚くののしり、誹謗、中傷の限りを尽くす夫人に辟易した式部卿宮は詢々とたしなめるが、何ら効を奏さない。むしろ火に油を注ぐ体であるが、その結びは次のようである。

いよく、腹立ちて、まがくしきことなどを、いひ散らし給ふ。この大北の方ぞ、さがな者なりける。〈同・一三八〉

前引の北の方の雄言のなかには「おのれふるし給へるいとほしみに」等、源氏の養女に対する不謹慎な憶測も含まれ、まさに高貴な女人には不似合な俗物的発想であるが、そうした彼女の連発の言動に対する総括が「さがな者」の刻印である。それはここにとどまることなく、その最終登場場面である若葉下巻でも再度確認されている。それはこの騒動で実家に戻つた長女の娘、真木柱の姫

君が後々、螢兵部卿宮と結ばれた折である。亡き妻の面影を慕う螢宮はいささか気配の異なる真木柱に戸惑いを禁じえず、通いものの憂いで周囲を失望させるが、ことに祖母、大北の方の胸中は穏やかではない。幼くして父鬚黒と引き離されを孫娘の螢宮との縁について、

おほ北の方といふさがなものぞ、常に許しなく、ゑんじきこえ結ぶ。「みこたちは、のどかに」心なくて、見給はむをだにこそ、花やかならぬ慰めには、思ふべけれ」とむつかり給ふを、宮も、もり聞き給ひて、〈若菜下・三二五〉

花やかな入内を見送ったからには、男君から誠心誠意の愛を尽くされて当惑のことという豪語に、螢宮は心外の極みで、それ以降、好転は望めなかった。結局大北の方は徹頭徹尾悪しき役向きを演じ切り「さがなもの」の烙印を再確認されて降板となるのである。

さきにもふれたように弘徽殿太后も加齢とともに「さがなさもまさりて」〈乙女・三二〇〉息子の朱雀院を手こずらせていたが、いわゆる年寄りのひがみ的な、単純にしてある種の憎み切れない面もあったのに比して、これはまさに救いのなさの一語に尽きよう。第二部の世界にまで引きづられてゆく紫上の継母の物語の怨念の深さが偲ばれるが、なぜ大北の方はここまで極め付の悪役の任を課せられたのであろうか。

その理由の一つには継母と継娘という女同志の宿命的な憎悪の構図があげられよう。継母と継息子より苛烈な対人関係であり、落窪物語にその典型を見る通りである。もう一つに紫上をめぐる物語の久しい歩みのなかには薄幸の少女から比類なき幸い人へ、そして悲運の晩年へというプロセスに、一貫して負の翳りを添える要因として大北の方の存在は欠かせなかったであろう。ともすれば夢物語的イメージも払拭しきれない紫上の至福の時代も含めて、継母の冷え冷えとした視線は物語の進展に現実的、重層的気配を看取させるのに効を奏しているとも言えよう。

悪しき役割を負わされて造型された二大女性ともいえる弘徽殿太后と式部卿宮の大北の方、ともにさがな者のレッテルを貼られた高貴で強烈な個性を付与された人々であるが、微妙に異なる晩年の映像も含めて大河の物語の流露に多大な投影を及ぼす脇役たちである。

四

弘徽殿女御や式部卿宮の大北の方はある程度の期間にわたり物語に登場し、ほぼ一貫して不穏な役向きを担わされているが、一方、その場限り、あるいは一卷限りで同様な傾向の任務を受け持っている傍役たちもある。たとえば蓬生の巻の末摘花の叔母や松風の巻、明石一族の大井の旧邸の宿守、また東屋の巻で浮舟と左近少将の縁を取り持つ仲立ちなどである。まず末摘花の叔母から見てゆくと、蓬生の巻に限られるがかなりの登場場面を持ち、場面ごとに強烈な個性が印象づけられている。その紹介の導入部には、

此の姫君の母北の方のはらから、世におちふれて、受領の北の方になり給へる、ありけり。

〈蓬生・一四二〉

とあり、まず宮家との身分的落差が挙げられている。当然面家の親睦などはなかったであろうが、

末摘花の乳母子の侍従が、かけもちの宮仕え先としてこの叔母のもとに出入りしたことで交流の糸口がひかれるが、状況は芳しくなかった。

この姫君は、かく、人疎き御癖なれば、むつましくもいひ通ひ給はず。「おのれをばおとしめ給ひて、おもて伏せにおぼしたりかば、姫君の御有様の、心苦しげなるも、えとふらひ聞えず」

など、なま憎げなる言葉ども、いひ聞かせつゝ、ときどき、きこえけり。〈同〉

極度に内向的な末摘花の性格のせいもあるが、その母である故常陸宮の北の方などがわが零落ぶりを忌避したことへの恨みが深いのである。姉に比して受領の北の方に身を落とした自らのコンプレックスが、何の罪もない姪へのいわれのない憎悪に転じているだけであるが、侍従に悪口雑言をちらつかせながらもわずかな交信が続けられてゆく。さらにこうした一種の被害者意識を超えて、この叔母には特異な個性が付与されている。

もとよりありつきたる、さ様のなみ／＼の人は、中／＼、よき人のまねに心をつくろひ、思ひあがるも多かるを、やむことなきすぢながら、かうまで落つべき宿世、ありければにや、心少しなほ／＼しき御叔母にぞありける。「我が、かく、劣りのさまにて、あなづらはしく思はれたりしを、いかで、かゝる世の末に、この君をわが女どもの使人になしてしがな。心ほせなどの、ふるびたる方こそあれ、いと、うしろ安き後見ならん」と思ひて、〈同〉

一般には並の身分の人々は高貴な人々の真似をして上品ぶるものであるが、意外な性根をあらわにしている。すなわちかつて自身を侮蔑した宮家の姫を今、わが娘たちの使用人することにより昔日の仇を取ろうとするわけで、高貴ぶるところか、俗物の性そのものである。かくて言葉巧みに誘いかけ、侍従にも常に口添えさせるが、末摘花は応じない。が、他意あつてのことではなく、

人に挑む心にはあらで、たゞ、こちたき御物つゝみなれば、さも睦み給はぬを、「ねたし」となむ、思ひける。〈同・一四三〉

当人はさして叔母に叛意を覚えているわけではなく、異常なほどの引つ込み思案で人との交流が不得手なだけであるが、姪の真意を読みとれない北の方はひたすら憎く思うのみである。母も母なら娘も娘よ、受領の妻に成り下がった自分を侮辱して、宮家がこれほど落ちぶれた今になつてもまだ昔の誇りを鼻にかけて……と、その忿懣はやる方ない。まさに俗人的憎悪の感情が露骨に示されているが、それでもまだ諦めない。

ほどなく叔母の夫が大宰の大貳に任官し、一家で赴任することになるが、「この君を、なほも、いざなはむの心深くて」〈同〉いかにも情深げに説き伏せようと「言よがる」〈同〉が、それでも一向に得心する気配もない。

「あな憎。事／＼しや。心一つにおぼしあがるとも、さる敷原に年経たまふ人を、大将殿も、やむことなくしも、思ひ聞え給はじ」など、怨じうけびけり。〈同〉

あの手この手と巧言を弄しても、のれんに腕押し⁽⁶⁾の仕儀に業を煮やした北の方は、この廃屋でいくら待つても源氏の再訪など望めまい、と怨念と憎しみに呪いの言辞も憚らない。「うけぶ」の語は式部卿の宮の大北の方にも使われていたが⁽⁶⁾、およそ高貴な女人には不似合な語感である。しかしその推測通り、源氏が帰京しても末摘花のもとへの音信は皆無であつた。勢いついた叔母はいよいよ悪

役ぶりを發揮してゆく。

大貳の北の方、「さればよ。まさに、かく、たづきなく、人わろき御有様を、かづまへ給ふ人はありなむや。仏、聖も、罪かろきをこそ、導きよくし給ふなれ。かゝる御ありさまにて、なほたけく世を思し、宮、うへなどのおはせし時のまゝに、ならひ給へる御心おごりの、いとほしきこと」と、いとゞ、をこがましげに思ひて、〈同・一四四〉

源氏の離京中はそれでもいつかはとひた待つ気持もわからぬではないが、無事帰洛の後、諸方との花やかな交誼にもかかわらず、ここには何の音沙汰もない事態に、それ見たことかと一種の快感の体である。神仏も罪障の軽い者を浄土に導いてくれるようだから、こんな落魄した古宮の住人を源氏が人数に思うはずもない、いつまでもかつての姫君気取りで、気の毒なこと、と言つて時の流れに全く無頓着な、世間知らずも甚しい末摘花に冷酷な視線を浴びせかけている。

この叔母の、姪に向けられた一連の冷視の原因には、当人に対する諸々の思惑以前に自らの現在の立場、受領の妻という状態への劣等意識が根幹にあることはさきにも触れたが、筑紫下向を目前にした別れの場面でもそれがくり返されている。再々の説得にも応じない姪に立腹を抑えかねないものの、最終的には乳母子の侍従も叔母の甥と連れ添つて離京することになり、侍従を迎えがてら、再び宮邸を訪れたときである。冬を迎えいよいよ荒れゆく陋屋のなかで、当人もようやく「夢、今ひとたび」の望みも断念しかけたころであるが、

大貳の北の方、にはかに来たり。例は、さしもむつびぬを、さそひたてまつらんの心にて、たてまつるべき御装束など調じて、よき車に乗りて、おもゝち、気色、ほこりかに、物思ひかなるさまして、ゆくりもなく走り来て、門あけさするより、人わろくさびしきこと、限りもなし〈同・一四六〉

何とか末摘花の下向を促そうとしてその装束を用意し、花やかな車で何の前ぶれもなく乗り着け、得意満面の風情と宮邸の荒廃ぶりが対照的である。が、なぜ北の方はここまでして彼女の同行にこだわるのであろうか。表向きは面親もなく孤独な境涯の姪の向後を案する叔母心であるが、それだけではないことは明らかである。やはり久しい間の怨み、つらみが根深くその胸内に潜在している所以であろう。別れに臨み、その「叔母心」を披瀝して「うちも泣くべきぞかし」〈同・一四七〉といかにも温情めたかであるが、「されど、行く道に心をやりて、いと、心ちよげなり」〈同〉と夫の榮達に浮き立つ心情もそれなりに邪氣がない。そして例の口上である。

故宮おはせし時、おのれをば、「面ぶせなり」と思し捨てたりしかば、うとくしき様になりそめにしかど、年頃もなにかは。やむことなきさまにおぼしあがり、大將殿などもおはし申し通ふ御宿世のほどを、かたじけなく思ひ給へられしかばなん、睦び聞えさせんも、はゞかる事多くて、すぐし侍るを。世の中、かく、定めもなかりければ、数ならぬ身は、中く、心安く侍る物なりけり。：：〈同〉

末摘花の父宮の存命中、北の方の肉親である自分が身分の低い夫を持ったことで、宮家の名譽を汚したと非難されたことが今だに脳裏を離れない。たまたま源氏のような高貴な男君に通われ、その差は開くばかりで疎遠になつてしまつたが、しかし世の変転ははかり知れず：：と目の前の悲惨な成

行を述べたてて、いわゆる「叔母心」をちらつかせ、筑紫への下向を思い定めさせようとする。それでも承知しない姪に対して最後のとどめをさしている。すなわち頼みの綱に思う源氏は今や紫上一人にしか志がなく、多くの通所もみな絶えてしまったと言って、

まして、かう、物はかなきさまにて、藪原に過ぐし給へる人をば、「心清く、我を頼み給へるありさま」と、たづねきこえ給ふこと、いと難くなむあるべき。(同・一四九)

あなたがいくら望みを繋いでも、こんな廃屋であるの方一人を待つていたなどと思つてくれるはずもないなど残酷な言い様であるが、末摘花も「げに」と納得せざるをえないのもまた現実なのである。一見、非情に見える叔母の言動も、古えの夢に幻惑されるように処世拙く生きるあまり、周囲にも多大な困惑を強いることにもなりかねない、旧弊な宮家の姫君には的を得た警鐘とも云えるであろう。ただ、その背後に、無知な姪に現実認識を促そうとする恩愛の情を超えて、かつてその両親から受けた侮蔑的視線に対する恨みの一念、いわば復讐心にも似た憎悪の思ひがひたと寄り添っていることが問題なのである。この叔母の登場場面はここが最後であるが、さらに巻末に一言だけ語り手の言が付されている。

叔母が侍従を伴つて離京してほどなく霜月を迎え、常陸宮邸は極寒と極貧のなかに年を越えるが、翌年の四月、父宮の霊に導かれるように源氏との再会が果たされ、¹⁷⁾以後は知られるまさにめでたき仕儀となる。修復された旧邸に二年ほど住まい、後に二条東院に移り相応の待遇を受けて人々の目を驚かすが、

彼の式部の北の方、のぼりて、おどろき思へるさま、侍従が、うれしき物の、今しほし、まぢ聞えざりける心浅さを、恥づかしう思へる程など、いますこし、問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたく、うるさく、物憂ければなむ。今又も、ついであらむ折に、思ひ出で、なん、聞ゆべきとぞ。(同・一六〇)

蓬生の巻の結びで、末摘花の予想外の幸運ぶりに悲喜交々の人間感情、思惑などに触れられているが、実際の描写等は一切なく、語り手の頭痛などの理由で省筆されているところに、いわゆる俗物たちの諸々の胸の内がより鮮烈に想定される所以である。叔母の驚きとある種の羨望やともすれば嫉妬の念、また侍従の喜び、安堵の思いとともに悲惨な境遇の女主人を見捨てたことへの慙愧の念、等々、様々な、そして複雑な感情、心情の交錯が語る以上の効果を行間に響かせているのである。侍従の母は末摘花の乳母であり、その母から女君と生涯を共にしよう論されていた彼女の心の痛みは当然としても、叔母の真意はそう単純ではないかも知れない。姪の意外な成行を驚きはしても決して心底よろこぶ気配ではない。むしろ、再び昔日の悪夢をむし返し、当てのはずれたような心残りを覚えているかも知れないであろう。

末摘花の叔母の登場はこの巻のみであり、ごくわずかな言及ながら初音の巻まで持ち越されている兄の阿闍梨の君とは対照的である。¹⁸⁾この巻では叔母にはかなりの筆がさかれているが、一貫して悪しき役割を担い続けている。晩年にやや気弱な面も見せている弘徽殿女御より、式部卿宮の大北の方に近いようでもあるが、それほど強烈な悪役ぶりでもない。過去の恨みから不自由なあまり、わが娘の使い人として仇を取ろうとする気概はまさに悪役の名に恥じないが、ずけずけと物を言い、

派手な車を乗りまわし、夫の栄転に浮き浮きしている俗物ぶりには何がしかの人間のほほえみしさも禁じえない。こうした破天荒な叔母に対して末摘花の反応が一切示されていないのも一種の救いともいえるが、宮家の北の方と受領の妻という姉妹の構図は後の宇治の世界における八宮の北の方と、その姪の受領の妻、中将君、すなわち浮舟母という人間模様に見合うものかも知れない。

悪しきイメージを課せられた脇役たちには一面、やや失笑を買うような道化的イメージを伴う場合も多く、近江の君などもその好例であるが、どこかで憎み切ることのできないほの温かさ、ユーモラスな気配も漂っているのが末摘花の叔母の造型であり、式部卿宮の大北の方と基本的に異なるところであろう。

五

これまで女性たちの悪しき役向きについて二、三見てきたが、次に男性の場合をとりあげてみたい。そのはじめは松風の巻、明石一族の京の旧邸を預る宿守の男である。

源氏の帰洛後、明石君と姫君たちの都入りに際して、源氏の用意した二条院東院への移住を辞退した明石君は、父入道の手配で京の郊外の大井の旧邸に移ることになる。入道は北の方の祖父、中務の宮の遺領を急遽、修築することを思い立ち、荒れ果てた屋敷を代々預っている「宿守のやうにてある人」〈松風・一九二〉を明石に呼び出して諸事を依頼する。

「自分は都を捨てた身だが、娘のことで京の住まいが必要になり、市中は騒々しいので」と言つて、全面的に修理するよう伝え、男は次のように言う。

この年ごろ、領する人も、ものしたまはず、あやしきやうになりて侍れば、下屋にぞ、つくろひて宿り侍るを。この春の頃より、内の大殿の造らせ給ふ御堂近くて、かのわたりなむ、いと、気騒がしうなりにて侍る。…しづかなる御本意ならば、それや、違ひ侍らむ。〈同〉

入道の突然の要請に内心不愉快な宿守は二つの点で反対している。一つは長年放置され続けて邸は荒れ放題で、自分がかろうじて下屋をとり繕つて住んでいること、すなわち本邸の修復などは不可能に近いというのである。また二つに、入道の申し入れの口上に、田舎人は町中の住まいより郊外の静かな地の方が望ましいとあることを受けて、最近、源氏の嵯峨の御堂造りで近辺が騒々しく不適切であろうというのである。前者はともかく後者は入道にとつてむしろ好都合であり、源氏とのゆかりにもふれて、再三依頼すると、さらに次のようにある。

「身づから領するところに侍らねど、また、知りつたへ給ふ人もなければ、かゝかなるならひにて、年ごろ、かくろへ侍りつるなり。御庄の田、畑などいふことの、いたづらに荒れ侍りしかば、故民部の大輔の君に申し賜はりて、さるべき物などたてまつりてなん、領じつくり侍るを」なむど、そのあたりの貯への事どもを、あやふげに思ひて、鬚がちにつなし憎き顔を、鼻などうち赤めつゝ、はちふき言へば、〈同・一九三〉

宿守は久しく培つてきた平穩な暮らしが入道の計画で損われることを危惧し、戦々恐々たる思いである。そこで自らの既得権を強調するとき口実をあげつらうが、もとより入道には相手の権益を

侵害する意図など毛頭ない。すべて従前通りにとしながら、

大殿のけはひをかくれば、わづらはしくて、そのうち、物など多く受けとりてなむ、急ぎ造りける。〈同・一九四〉

という成行である。耕作物の貯えなど奪われないか、あれやこれやと疑心暗鬼の宿守は、鬚面の憎げな顔で鼻を赤くしながらうそぶいて、不満気味ながらも、源氏の威光を匂わされてやむなく承諾する。その際、入道から多くの物を受け取つてと、まさに俗物の典型であるが、貴族社会には相容れられない下賤な話しぶり、容態などが活写されている。彼の登場場面はこのみであるが、いわゆる俗物ではあるが、小心で保身に余念がないだけで、それほどの悪意はなく、ある意味ではほえましさも看取される傍役の造型である。

次は東屋の巻、浮舟と左近少将の縁をとり持つ仲立ちの男である。同じく一卷のみの登場であるが、さきの宿守より登場場面も描写量もかなり多く、物語の進展に深くかかわっている。数ある浮舟への懸想人のなかで左近少将をと思ひ定めた浮舟の母は、八月にという約束を待ち切れない少将の様子に、今後のことも考えて「初めより伝へそめける人」〈東屋・一三四〉に内情を明かすことにする。すなわち浮舟が常陸守の娘ではないことを告げて相手の真意を確かめようとするのであるが、真相を知った左近少将は不快感を禁じえない。よく事情も調べずに橋渡したことをなじられた仲立ちは気の毒には思うものの、自分は一切知らぬこと、母君が特別大切にしている美しい娘と聞いたまでと言う。折しも少将が、

「いかで、かの辺の事、伝へつべからん人もがな」と、の給はせしかば、「さる便、しり給へり」と、執り申ししなり。更に、浮びたる罪、侍るまじき事なり」と、腹悪しう言葉多かる者にて、申すに、〈同・一三六〉

と、自身には全く非はないと言い張るが、性悪で口数が多いという人物設定である。

一方の左近少将も「いと、あてやかならぬ様にて」〈同〉受領風情の婿になるからには、父方の余程の財力、後見が必須で、継娘では話にならないと現実志向そのものである。これに対して、「この人、追従あり、うたてある、人の心にて、これを、いと、口惜しう、こなた、かなた、いとほしう思ひければ」〈同〉と、縁談の不成立を無念に思った仲立ちは次なる手を打つことになるが、ここでまた「追従あり、うたてある、人の心」と権力迎合主義の不実な性格が強調されている。

仲立ちが思案した次なる策は、知られるように浮舟から常陸守の実の娘への乗り替えである。

「『誠に守のむすめ』と思さば、まだ若うなどおはすとも、しか、伝へ侍らんかし。中に当るをなむ、姫君とて、守は、いとかなしうし給ふなる」と、きこゆ。〈同〉

後に、二条院で中君の女房たちが、この少将について、約束した浮舟を捨て「かじけたる女の童」〈同・一五二〉を得たと噂しているが、このまだ幼い少女に切り替えたのである。さすがに少将もこの違約に北の方の思惑を顧慮するものの、現実派路線を突き進むことになり、すべてが仲立ちの裁量に委ねられてゆく。

この男は妹が北の方付きの女房であつたことで仲介者になつたのであるが、事態の急転に突如、北の方を見限り夫の常陸守に取り入ろうとする。何の前触れもなく、「たゞ、行きに、守の居たりけ

る前に行きて」〈同・一三七〉面談を申し込むと、常陸守の不機嫌そうな「なま荒くしき気色」〈同・一三八〉に閉口しながらも、延々と少将の婿入り志願の経緯を述べ立てる。予想外にも浮舟は継娘なので是非実の娘御と言うのであるが、その時、君達が受領の婿になることについて、

たゞ、私の君の如く、思ひかしづきたてまつり、手に捧げたるごと、思ひ扱ひ、後見たてまつるにかゝりてなむ、さる振舞し給ふ人く、物し給ふめるを。さすがに、その御願ひは、あながちなるやうにて、をさく、受けられ給はで、氣劣りておはし通はむこと、便なるべき由をなむ、せちに、謗り申す人々、あまた侍るなれば、たゞ今、思し煩ひてなむ。〈同〉

とある。すなわちさきにあつた少将の現実的功利主義が、そのままより具体的にくり返されているが、ここでは少将本人の思惑というより、周囲の人々、たとえば親戚、縁者、側近たちの多大な反対があつて当人も苦慮しているという体裁をとっている。世知に長けた仲立ちは今後のことを考えて、少将を悪役をすることを極力避けようとするのであり、また自身をも傷つけることなく、複数の第三者に北の方との違約の咎を転嫁しているのである。一見、功利派の少将を庇っているようではあるが、必ずしもそうではなからう。新しい縁談をまとめるためには、少将にはよき貴公子ぶりを演じてもらわなければならず、やむなく脚色したのである。

ところで先方から受領風情の婿になるからには…などと言われて常陸守はどう思ったのであろう。一般には不快感を禁じえないはずであるが、彼は満面の笑みを浮かべて快諾している。荒々しい東国廻りの続いたこの守は、経済力にものを言わせて娘婿のためには最大限の後援を惜しまないと力説する。ただせつかくの計画を台無しにされた北の方の心情を憂慮するのみであるが、相手のよき氣配に安堵した仲立ちはうれしく、さらに長々とまくしたてる。一つは北の方への懸念は無用であること、そして少将がいかに得がたき君達であるか、帝の信任も極めて厚く、早くの昇進も疑いない、よつて「我もく、婿にとりたてまつらん」〈同・一四一〉と求婚者が殺倒し、当家で「扱くなる御けはひあらば、外さまにも、思しなりなむ」〈同〉とまさに仲人口そのものである。

いと多く、よげに言ひ続くるに、いと、浅ましく、鄙びたる守にて、うち笑みつゝ、聞き居たり。〈同〉

この口馴れた仲立ちに対して、一方の常陸守は疑念をさし挟むどころかすっかり丸めこまれた体である。が、この後、守もまた延々とわが存念を披瀝してゆくのである。すなわち自分がいかにこの娘を愛しているか、その婿君のためならいかなる労も散財も惜しまないこと、たとえ大臣の位でも買い取つてやれると言うのである。互いに猿芝居の趣も否めないが、大任を果たした感の仲立ちは、北の方や妹には一顧だにせず、その経緯を少将に報告する。

守の言ひつる事を、「いともく、よげにめでたし」と思ひて、聞ゆれば、君、「すこし、鄙びてぞある」とは、聞き給へど、憎からず、うち笑みて聞き居給へり。大臣にならむ、贖勞を取らむなどぞ、「あまり、おどろくしき事」と、耳とまりけり。〈同・一四二〉

常陸守の快諾の知らせに少将は満足気である。それにしてもあまり大袈裟な婿にたわりに田舎じみたわざとらしい感触も否めないが、常陸守と同じく「うち笑みて」聞き入っている。二人ながらこの仲立ちの口上手に幻惑されているとも言えるが、この口車に乗せられたのは男二人だけではない。

さすがの少将もここに至つて常陸守同様北の方の胸内を忖度するが、仲立ちはいずれにしても同じ母の娘であるからと説得している。が、その北の方が少将と浮舟との縁を定める事情は次のようである。連れ子の処遇を思い煩い、

「いかゞはせむ。盛り過ぎ給はむも、あいなし。賤しからず目安き程の人の、かく、懇ろにの給ふめるを」など、心一つに思ひ定むるも、中立の、かく、言よくいみじきに、女は、まして、すかされたるにやあらん。〈同・一四三〉

大の男の常陸守はもとより、女の北の方はいともたやすく仲立ちの巧言に乗せられたという仕儀である。浮舟ほどの美しさで少将ぐらいが相手では残念ではあるが、かと言つて常陸守の一族ではさしたる縁も望めまい、八宮の娘と言つてもその証しも立てがたく、また一方で零落した高貴な血筋などより、富裕な財力がものを言う時勢であるから……種々思案の末、婚期を逸することも懸念され、結局仲立ちの口よさに「すかされ」てしまうことになる。

ここでは仲立ちの悪役ぶりが、さきの宿守に倣して、かなり詳細に具体的に活写されているが、考えてみれば悪役は彼一人でない。その役向きを陰であやつり、自己の利益を獲得しようとする左近少将こそ罪深く、何くわぬ顔で手を汚すことなく目的を達成しようとする分、たちが悪いと言わざるを得ない。また常陸守も北の方の思惑を完全無視して仲立ちの言いなり放題で、果ては悪口雑言をはき散らして母子を追ひ詰めていく過程は問題であらう。ただ彼の場合、自己の利害云々というより、娘への心の闇、盲愛のなせるわざであり、日頃北の方から宮家の姫君である浮舟との格差を見せつけられてきたような一種の被害妄想の所以でもあり、悪質の一語に決めつけることも憚られよう。後に北の方が浮舟と薫との縁を乳母から勧められたとき、高貴な男君との不似合な縁の悲哀を身をもつて実感したわが人生に思いを致し、常陸守はどうしようもない「様悪しき人」ではあるが、自らを北の方として大切に遇してくれることに一定の評価を与えているのである⁹⁰⁾ やはりどこかに憎み切るこのできない、何がしかのほへえまじさ、人の温もりも看取されるのであり、三者三様の男たちの悪しき役回りも笑止千万なる人間総巻というところであらうか。

六

源氏物語の多様な登場人物たちのなかで、悪しき役向きを担っているのはこれまで辿ってきたような脇役、端役たちばかりではない。光源氏をはじめいわゆる主要人物たちのなかにも折にふれ、時に応じてその種の役柄が相応に課せられていることも稀ではない。一般に昔物語の世界では善役と悪役が明瞭に区分されている傾向が強いが、この物語では必ずしもそうではない。いわば双方が役割分担において完全に一線を画することなく、相互乗り入れしている感も否定できないのである。たとえば宇治の八宮は篤実で信仰心が厚く、学識教養に富み、理想的人物像を帯して薫に讃仰されているが、故北の方とその遺児達を一途に愛しながら、女房の中將の君とかかわり、事実上彼女とその娘の浮舟を見捨ててしまっている。当時のことゆえ、北の方以外に、しかもその没後に他の女人とかかわること自体に非があるはずもないが、問題はそれを容認することを憚り、無情にも母子

を忌避したことである。もつともこれも現代とは異なり、それほど悪行として非難される趣でもないかも知れないが、それにしてもおよそ善行とは言いがたい。俗聖の八宮像に何がしかの汚点を残すことは否めないが、まして若き日の源氏や匂宮のプレイボーイぶりはかなり糾弾されてしかるべきであろう。

また、右のような目に見える形での好ましからざる所行のほかにも、各々の心象世界をはじめ、そして世評などに晒される懸念のない次元での罪つくりな想念、言動なども多様に辿ることができよう。

花散里は源氏の女君のなかでもあまり美的ではなく、いわゆる物語のヒロインとは異なる視点から造型されているが、¹⁰⁰源氏が明石から戻りかなり経ってからようやく再会が果たされた時、次のようにある。花散里の姉で故桐壺院の麗景殿女御に挨拶し、夜ふけてから彼女のもとを訪れると、控えめな様子で歌を詠み、

いと、なつかしう、いひ消ち給へるぞ、「とりぐ」に、すてがたき世かな。かゝるこそ、中／身も苦しけれ」とおぼす。△濤標・一一五△

女君にとって恐らく一日千秋の思いで待ち続けたこの日、源氏も感慨は禁じえないが、「とりぐ」に捨てがたき……」というくだりは何とも無残ではないか。彼も相手の誠実な人となりを充分理解し、「とし頃、まち過ぐし聞え給へるも、さらにおろかには思されざりけり」△同・一一六△とあるが、この場面の結びは次のような二人のやりとりである。

「なごて、『たぐひあらじ』と、いみじう物を思ひ沈みけん。うき身からは、おなじなげかしさにこそ」とのたまへるも、おいらかに、らうたげなり。例の、いづこの御言の葉にかあらん、尽きせずぞ、語らひなぐさめきこそ給ふ。△同△

須磨下向の時、なぜあんなに悲しんだのでしょうか、都にお帰riになつてもあなたの訪れはなく、同じつらい身なのに、という女君のやさしい風情に源氏は慰めの言葉を尽くすが、「例のいづこの御言の葉にかあらん」という冠が付されている。そう言えば源氏が紀守邸で初めて空蝉に逢った時も次のようにあった。空蝉の身を案ずる女房の中將の君に「あかつきに御迎へに物せよ」△書木・九六△と言つて帰るとき、

女は、この人の思ふらん事さへ、死ぬばかりわりなきに、流るゝまで汗になりて、いとなやましげなる、いとほしけれど、例の、何処よりとうで給ふ言の葉にかあらむ、あはれ知るばかり、なさけ／＼しくの給ひ尽くすべかめれど、なほ、いとあさましきに、△同△

空蝉は女房の思惑も後めたく動揺を抑えかねているが、源氏は多言を弁して情愛深く語りかけることに余念がない。ここでも「例の、何処よりとうで給ふ言の葉にかあらむ…」と、いつもながらの何とも言葉巧みな風情である。

また、さきの花散里以上に美的ではなく造型されているのが末摘花であるが、この女君にもこの種の言辞が駆使されている。蓬生の巻、源氏の離京以来、久しい歳月を極貧なかに待ち続けて再会がなつた日、女君の誠意に深い思いを致しながらも、男は諸々無沙汰の言訳に懸命である。帰京後もあなたから何のたよりもなく恨めしかつたが、とうとう根負けしてしまつた、あなたの本心も

わからぬままにこの草の茂みを分け入って来た私の真心をどう思われるかと言う。そして、

「……年頃のおこたり、はた、なべての世に、おぼし許すらん。今より後の御心になはざらむなむ、『いひしに違ふ』罪も負ふべき」など、さしも思されぬこと、なさけ／＼しう、聞えなし給ふこともあんまり。たちとまり給はむも、所の様よりはじめ、まばゆき御有様なれば、つきつきしうの給ひすべして、出で給ひなむとす。△蓬生・一五七△

そもそも末摘花との再会は初めから源氏の本意でなされたわけではなく、花散里訪問の途次、たまたま荒廃ぶりも甚だしい旧邸を通りかかつて、という設定になっている。当然女君へのあふれるような情愛があるはずもなく、相手の真情にほだされるように、一種の同情心の所以でもあるが、それでもあまりのわびしい邸内の光景に感慨を禁じえない。そこで離京中はともかく、帰京後も久しく音信を怠ってきた後めたさに、それほど思つてもいないことをあれこれ巧言、虚言を運ねていかにも情深げに語りかけている。さらに長居を避けて適当に言い逃れをして座を立とうとしているのである。

末摘花は源氏にとつてもともと愛の対象たる女君ではなく、今の無残な境遇と亡き父宮への思惑などから、¹¹¹⁾庇護の対象としてその胸内にわずかに息づいていたが、それにしても虚言を弄して這々の体で逃げ帰ろうとする仕儀は少なくとも紳士的とは言えまい。ポーカーフェイスもよいところであるが、彼は決して冷笑、冷視に徹していたわけではない。これまでこの深い蓬の茂りのなかでどのような思いで暮らしてきたことか、それを今日まで訪うこともなかった「わが御心の情なさも」△同・一五五△身にしみて実感され、向後、手厚に配慮を惜しまないのである。それはさきの空禪の場合も同様であるが、二人ともに後日、二条東院に迎えられ、平穩に余生を送っている。源氏にはかく、すぎとまめの要因が車の両輪のように相俟つて造型されているのであり、多言、虚言を弄して女君たちを幻惑させる悪しき面のみで裁定することも憚られるわけである。

右はいずれも若き日の源氏の好ましからざる役向きの例であるが、中年期を迎えたころでは、たとえば斉宮女御や玉鬘への不謹慎な思い等があげられよう。二人ながら源氏の養女扱いであり、彼女たちへの懸想はまさに道ならぬ恋の誇りを免れない。結果的にはともに机上の空論に終わるが、そのプロセスにおいては問題なしとは言えない。

薄雲の巻、二条院に里下りした斉宮女御のもとを訪れた源氏は、簾内で几帳ばかりを隔てて対面するが、女御の母、六条御息所との思い出、野の宮の別れの場面などを語り、續々感慨を禁じえない。すると、

宮も、「かくれば」とにや、少し泣き給ふけはひ、いと、らうだげにて、うちみしろき給ふほど、あさましく、やはらかに、なまめきて、おはすべかめる。「みたてまつらぬこそ、くちをしけれ」と、胸うちつふるゝぞ、うたであるや。△薄雲・二四〇△

しみじみと往時の母を偲ぶ源氏の様子に女御も心動かされ、少し泣いている気配が何とも愛らしい。ふと身じろく様子も驚くほどやさしく上品な風情が偲ばれ、直接顔を合わせられないもどかしさで胸つぶれる思いであるが、そうした邪心について「うたであるや」と語り手の弁がある。かつてはともかく、「今は、むげの親さまにもてなして、あつかひきこえ給ふ」△同・二三九△という立場上、

許されない妄念であろう。ただこれは彼の心内だけで女御には直接伝わらない次元でのことであるが、この後、さらに御息所の話題にふれつつ、わが思いをほのめかしてゆく。

「…かく、たち帰り、おほやけの御後見つかうまつる喜びなどは、さしも、心に深くしまず、かやうなる、すぎがましき方は、しづめ難うのみ侍るを。おぼろげに思ひ忍びたる御後見とは、思し知らせ給はんや。『あはれ』とだに、の給はせずば、いかにかひなく侍らん」との給ふ。むつかしうて、御答へもなければ、「さりや。あな心憂」とて、こと事に言ひまぎらはし給ひつ。△同・二四一△

都に戻り、朝廷の重鎮となつたことなどうれしくもなく、ただ女人への慕わしい思ひだけが鎮めがたい、あなたの入内、後見も、私の内心の慕情を抑えてのことと察してほしいと言うのである。当惑した女御の答へもないのであわてて話題をそらせてしまうが、この後、長々と春秋論を開陳しながら、春秋いずれに関心が深いかを問うている。ためらいながらも女御が母の没した秋を挙げると、

しどけなげにの給ひけつもの、いと、らうたげなるに、え忍び給はで、
「君もさばあはれをかはせ人知れずわが身にしむる秋の夕風
しのびがたき折／＼も侍りし」と、きこえ給ふに、いづこの御答へかはあらん。「心得ず」と思したる御気色なり。このついでに、えこめ給はで、恨み聞え給ふことゝもあるべし。

△同・二四三△

季の優劣を定めかねながらも、亡母との別れの秋に思いを馳せて口ごもる女御の様子に、愛執の念を抑えかねた源氏はわが思いをほの見せてしまうが、相手の返事が得られるはずもない。養父の所行に困惑し、少しずつ奥に引き入る女御の気配にやむなく退散するが、彼の自己抑制の所以は若気の過ちはともかく、今にしての不心得は許されないという自重心のなせるわざである。¹⁰⁴

齊宮女御の場合、六条御息所の遺言もあり、また皇妃という立場への憚りもあつたが、一方の玉鬘に対してはやや奔放な感も否めない。結果的にはブラトニックに終わっているが、その過程においてはかなり悪しき男の役向きを熱演している。

夕顔とのほかない青春の恋の思い出を手繰り寄せるように、玉鬘を六条院に迎えた源氏は養女としてその母夕顔の面影を偲ぶなかに、あやにくな思いが首をもたげるのをいかんともしがたい。彼女が新生活にも少し馴れかけたころ、

いと、もの清げに、こゝかしこ、いとけさやかなる様し給へるを、「かくて見ざらましかば」と、おもほすにつけても、えしも見過ぐし給ふまじくや。△初音・三八一△

と、手元に引き取つたことをうれしく思いながらも、そのままに見過ごせない危うさをも覚えてい

る。そして多くの懸想人から次々と玉鬘に文が舞い込むにつけても、
されど、おとゞ、おぼろげに思し定むべくもあらず、わが御心にも、すくよかに親がりはつまじき御心や添ふらん、「父おとゞにも、知らせやしてまし」など、おぼしよるをり／＼あり。

△同・四〇一△

なかなか婿を定められないのもわが怪しから執心のゆえであり、いつそのこと実父にしらせてしまおうかとも思いあぐねている。無論、相手の幸いを願うというより、わが妄執の暴走を避けるため

である。かくて、

おぼす様のことは、まばゆければ、えうち出で給はず。気色あることは、時々ませ給へど、
み知らぬさまなれば、すゝろにうち嘆かれて、△同・四〇七△

と、何とか紳士面を保っているが、それにも限界があつた。初夏のある夜、こうしてお世話するにつけても夢のようで、「猶、えこそしのぶまじけれ。おぼしうとむなよ」△同・四一〇△と言って玉鬘の手を取り、恋情を訴える。多くの求婚者のなかでも自分ほど安心な男君はいないので、あなたを任せるのが心配で、などと勝手なことを言うが、「いと、さかしらなる御親心なりかし」△同△と語り手の口調は厳しい。その翌朝、昨夜の衝撃で気分の悪い女君のもとに届けられた文には、あなたがあまりに心幼く私をうとむので、女房たちが不審に思うのでは、などと、「さすがに、親がりたる御言葉」△同・四一四△が書き連ねられている。玉鬘は「いと憎し」△同△と思うが、人目を憚って、「心地が悪く御返事もできません」とだけ書き送った。すると、

「かやうのけしきは、さすがに、すくよかなり」と、ほく笑みて、うらみ所ある心ちし給ふ、
うたである心かな。色にいで給ひてのちは、「太田の松」の、おもはせたる事なく。むつかしく聞え給ふこと多かれば、いとゞ所せき心地して、おき所なき物思ひつきて、いと悩ましうさへし給ふ。△同・四一五△

と再び語り手に糾弾されながら、一度口火を切るとさらなるたわぶれを加速し、玉鬘を困惑させてゆく。いつしか近やかに馴れ寄ったり△常夏・二一△、琴を枕に添臥したり△篝火・四〇△、夕霧に怪しまれるほど寄り添ったり△野分・五八△等々であるが、それでも自制心は失わなかった。さきに斉宮女御との違いにふれたが、螢の巻に次のような一節がある。

なほ、さる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくや思ひ聞え給へる。ことにふれつゝ、
たゞならず、きこえ動かしなとし給へど、やむことなき方の、及びなくわづらはしさに、おり
たちあらはし聞えより給はぬを、この君は、人の御さまも、けぢかく今めきたるに、おのづか
ら、思ひ忍びがたきに、をりく、人見たてまつりつけば、うたがひ負ひぬべき御もてなしな
ど、うちまじるわざなれど、ありがたく思返しつゝ、さすがなる御なかりけり。

△螢・四二五△

中宮（かつての斉宮女御）へは諸々憚りがあつたが、玉鬘には気安さが災いして不謹慎な言動も散見する。これは明らかな罪であるが、わが情念の暴発を抑える努力も怠らなかつたのであり、若き日の罪深さとは対照的である⁹⁰⁾。いずれにせよ恋多き源氏の多彩な悪しき所業は仏罰の謗りも免れないが、後の匂宮とは異なり、単なる好き者とも決めつけがたく、多様な人間的情感、想念から不自由であることも光源氏造型の実相と言えるであらう。

七

源氏には「すぎ」と「まめ」の画面があり、「すぎ」の部分では多分に罪深い役向きも演じているが、源氏物語後半の光源氏没後の世界では、匂宮と薫により役割分担がなされていると言われている。

る。すなわち前者を主に匂宮が、後者を薫が担うわけであるが、「すき」の面を持つ匂宮に不謹慎な言動が多いことは当然の成行であろう。次々と女君に執着し、果ては盟友の薫から浮舟を奪い入水未遂にまで追い込む仕儀は悪業の極みとも言え、当事者の薫はもとより、母后の明石中宮も非難の視線を向けざるをえない¹⁰⁴。中君も口上手に女君を操る彼の所行に苦々しさを禁じえず¹⁰⁵、まさに浮気男、悪役のレッテルを貼られても致し方ないところである。

それに対して一方の薫は源氏のための部分を引き継ぎ、篤実な信仰心の厚い、女性関係にも潔癖な理想的人物として顕彰されているが、果たして一点の翳りもなく、善意、善行のみに終始しているのか、と云えば必ずしもそうではない。大君の意に反して半ば不意討ちのように匂宮を中君のもとに導き、大君亡き後は匂宮の夫人となった中君に執心をあらわにするなど、男の妄念そのものである。匂宮については今さら言を俟たないが、ここでは、一見聖人君子の気に満ちた薫の所行のなかに、ある意味では人間らしいともいえる好ましからざる言動について辿ってみたい。

たとえば竹河の巻で、玉鬘の大君が冷泉院に院参したところを見ると、院の信任この上ない薫は古えの「光源氏の生ひ出で給ひしに劣らぬ」八二七八ノ声望を恣にして、

院のうちに、いづれの御方にも疎からず、馴れまじらひありき給ふ。この御かたにも、心寄せあり顔にもてなして、下には、「いかに見給ふらん」の心さへ、添ひ給へり。〈同〉

とある。冷泉院の後宮にも親しく出入りし、入内後まもなく花やかに時めく大君にもいかに好意を寄せているようなそぶりを見せ、内心、相手が自分をどのように思っているのか探りたいのである。彼女に思う心なきにしもあらずである所以であるが、すでに甲斐なき恋の相手ではあるが、その弟の藤侍従に、「まほにはあらねど、世の中恨めしげにかすめつゝ、」〈同〉、わが無念を託つのである。公明正大、清廉潔白の誉れ高い薫の人物像ではあるが、その入り口のころからなかなかの演技派なのである。そもそも薫と宇治の姉妹たちとの悲恋の物語には匂宮に多大な因があると言つてもよいが、その原因をつくつたのも薫自身であった。

八宮の宇治山参籠中に例の月下の楽の場面を垣間見、また弁の君の問わず語りでわが出生の秘密にふれ、宇治の人々との絆がより強くなったころ、山籠りから戻った八宮を訪ねようとするが、

三の宮の、「かやうに奥まりたらむあたりの、見まさりせむこそ、をかしかるべけれ」と、あらましごとくにだに、のたまふものを、「聞え励まして、御心騒がしたてまつらむ」とおぼして、のどやかなる夕暮に、まゐり給へり。〈橋姫・三二五〉

八宮の姫君たちの存在を強く意識下に置いて初めて宇治に赴くに先立ち、匂宮のもとを訪うている。それは単に山里の世間話を聞かせるだけではなく、日頃から「奥山のわび住まいの美しい女君」に関心の深い匂宮の興味をそそらせて心を動揺させるためであった。日頃から律儀な薫にしては不似合な発想であるが、あれやこれやと詳しく話しかけると、案の定、匂宮は興味津々で、

「さればよ」と、御けしきを見て、いとゞ御心動きぬべく、言ひつゞけ給ふ。〈同・三二六〉さらに言を駆使して相手を挑発してゆく。が、この時、姫君たちへの思慕の念のみならず、弁の君の昔語りの意も考慮すれば、かく軽率に語り出すことに不可解の感も否めない。結果的にはこれが匂宮と八宮家を結ぶ糸口となるが、以後に展開される物語の悲劇の遠因は概ね匂宮に帰せられると

しても、その出発点においては薫も多分に悪しきわざをなしているのである。また姫君への関心自体も眞の愛情云々とはやや次元を異にするものである。すなわち弁の君の問わず語りは軽々しく四方に言い広めることはないにしても、

「……いと、恥づかしげなめる御心どもには、聞きおき給へらむかし」と、推し量らるゝが、
ねたくも、いとほしくもおぼゆるにぞ、又、「もて離れてはやまじ」と、おもひよらるゝつま
にも、なりぬべき。△椎本・三六四△

と、姫君たちに秘密が伝えられているのではないかと疑心暗鬼のあまり、二人をわが手中にとり込めておきたい思惑も働いているのである。大君亡き後、今上の皇女を得ても心安まらず、故人の人形を求めてさ迷う純愛の人、薫君の像にはぞぐわない、いささか打算的ともいえる恋のはじめなのである。

かく不純な動機も見え隠れして大君姉妹との物語が開始されるが、誠実な愛の美名を恣にする薫君にこの後もいくつかの汚点が散見する。それは八宮の一周忌を前に裏中の大君の簾内に押し入ったり△総角・三八九△、老女房たちと示し合わせて大君の寝所に赴いたり△同・四〇四△、果てはだまし討ちのように匂宮を中君のもとに忍ばせたり△総角・四一四△等々、まさに悪行の限りであるが、これらの所行には大君への至純の愛ゆえという、一つの名目、説得材料がないわけでもない。たとえ理不尽な行動でも大君にわが本意を伝えたい一途な思いが明らかな所以であるが、彼がいかにも言訳をなさうとも決して許されることがないのが中君への執心である。元々大君から妹君を託されながら、それを拒み、故意に謀略を用いてまで匂宮と添わせておきながら、大君の没後、人妻の中君に言い寄ることはまさに邪念の極みであろう。しかし初めから自分に許された女君という既得意識の強い薫は事の重大さにさして気づいていない、否、気づこうとしないのであろう。

宿木の巻、匂宮と六君の婚儀に意気消沈する中君は、薫に宇治行きを依頼するが、簾内の女君の声や気配に、

常よりも、昔思ひ出でらるゝに、えつゝみあへて、寄りゐ給へる柱のもとの、簾垂の下より、
やをらおよびて、御袖をひかへつ。女、「ざりや。あな心憂」と思ふに、何事かは言はれん。物
も言はで、いとゝ、引き入り給へば、それにつきて、いと馴れ顔に、なからは内に入りて、そ
ひ臥し給へり。△宿木・七三△

六君の一件で平静を失い、ふと薫を頼ろうとした中君にも落度があつたが、それにしても相手の苦境につけ込むように、往時を偲びかねて壘行に走る薫も決して紳士的とは言えない。突然の事態に動揺し不快感を隠せない中君に恨み言を述べ立て、

これは、咎あるばかりのことかは。かばかりの対面は、いにしへをも思し出でよかし。過ぎにし人の御許しもありし物を、いと、こよなう思されにけるこそ、中／＼うたてあれ。「すぎ／＼しく、目ざましき心はあらじ」と、心やすく思はせ。△同・七四△

と、結果的には何事もなく終るものの、こうした対面は過去にもあつたこと、大君の許しを得ていたことを盾にして、わが罪を払拭しようとしている。さきの場面で、「いと馴れ顔に」半身を御簾の中に入れてとあるが、彼の言うかつての同様な対面の折にも次のように見えている。屋間からの女

房たちのそぶりからその夜、薫の入来を察知した大君は、中君を残したまま物かげに隠れると、

わなゝくく、見給へば、火のほのかなるに、桂すがたにて、いと、馴れ顔に、几帳の帷を引
きあげて、入りぬるを、いみじくいとほしく、「いかに思え給はん」と、思ひながら、

△総角・四〇四△

置き去りにされた中君がいたわしく、震えながら様子を見ていると、かすかな灯の中に桂姿の男が
現われ、「いと馴れ顔に」几帳の帷をあけて中に入ってしまったのである。女性問題には縁の薄いは
ずの薫であるが、何とも違和感を禁じえないところである^{o(=)}が、この種の厚顔無恥の体はさらに類
を辿ることができる。

さきの中君との対面の場面よりほどなく、六君のもとより二条院に帰つた匂宮は、薫の移り香に
疑念を抱くが、いかにしても心を抑えかねる薫は、再び匂宮の留守を狙うように、中君を訪れる。
先夜の轍を踏むまいと面会を拒む中君であるが、女房たちは母屋の御簾を下して彼を夜居の僧の座
に招じ入れてしまう。人々の手前、やむなく応ずるが、

いとほのかに、時く物たまふ、御けはひの、故君の悩みぞめ給へりし頃、まづ思ひ出でら
るゝも、ゆゝしう悲しうて、……こよなく奥まり給へるも、いとつらくて、簾の下より、几帳
を、少し押し入れて、例の、馴れ馴れしげに、近づき寄り給ふが、いと苦しければ、「わりなし」
と思して、△宿木・八七△

警戒心も一入の中君に対して、またしても恋情を禁じえず馴れ馴れしげに振舞うが、さすがの女君
もこれ以上黙認できず、胸の痛みを装って側近の女房、少将の君を呼び寄せる。それでも薫は諦め
きれず、わが思いのたけを、女房に悟られない程度に大君思慕にかこつけて長々と述べ立て、せめ
て故人の人形でもと願う薫に、中君はふと異母妹、浮舟の存在をほのめかす。すると『何事にか』
と、言ふまゝに、几帳の下より、手を取らふれば、いと、うるさく思ひならるれど、△同・九一△
と、人目を憚りさげなくもてなしている。さきの「馴れ馴れしげに」には「例の」の語が冠せら
れているが、かく薫は常習的にいわゆる非行を重ねているのである。

父八宮の恥を晒すことにもなる浮舟の存在を告げるには「いかさまにして、かゝる心をやめて、
なだらかにあらむ」△同△という中君の悲願があつたが、それが異腹の妹にとっていかなる幸、不
幸に繋がるかはともかく、問題がすべて解決するわけではない。薫の胸内深くには次なる女君の存在
にかかわりなく、中君への情念は潜在し続けているからである。それには故大君への追慕の一念と
いう美名が掲げられているとはいえ、明らかな邪念、不倫の愛であることは先にも述べた通りであ
るが、これについて語り手の口調も厳しさを増すところが見出される。たとえば、前引の中君から
宇治行きを相談されて、暴拳に及びながらもむなしく引き下がった翌朝、中君に送った文の返しの
冷淡さに失望しながらも、昨夜の余韻も含めて語々の思い出を辿るなかに、

「なにかは。この宮、かれ果て給ひなば、我を頼もし人にし給ふべきにこそはあめれ。さても、
願れて、心安き様には、えあらじを、忍びつゝ、又思ひます人なき、心の泊りにてこそは、
あらめ」など、たゞ、この事のみ、つと思ゆるぞ、怪しからぬ心なるや。さばかり心深げに、
賢しがり給へど、男と言ふ物の、心憂かりける事よ。△同・七七△

いずれ匂宮との縁が絶えてしまえば、中君は自分以外に頼る者はなかり、公然と夫婦というわけにはいかなくとも、人目を忍ぶ心の抛り所になるだろう、などと不謹慎なことを思いめぐらせている。匂宮と六君の婚儀の直後であり、中君の立場の不安定さが取沙汰される時期のせいもあろうが、それにしても不穏な思惑で、「怪しからぬ心」「男と言う物の心憂かりける事」と糾弾される所以である。

光源氏や匂宮はすき人、プレイボーイの名を恣に、ある程度、またかなりの悪しき所行も当然といえば当然であるが、彼らの反対の極にあるとも目される薫にして、やはり多様な好ましからざる行状も仄聞されるのである。これもいわゆる「男というものは…」という例の筆癖⁽⁴⁾に帰されるところであろう。

八

薫との友情の破綻に絶望した中君は、わが身の憂さを痛感し、「たゞ、消え失せぬ程は、あるに任せて、おいらかならむ」八宿木・七八ノと覚悟を決める。花やぎの新妻六君のもとより戻った匂宮を穏やかに迎え、例のごとく多言、虚言にうとましさを覚えながらも、向後の夫の久しい途絶えによる薫の接近を恐れて、次のようにある。

言に出でゝは言はねど、過ぎぬる方よりは、少し纏はしきまに、もてなし給へるを、宮は、「いとゝ、限りなうあはれ」と、思したるに、八同・七九ノ

言葉には出さないが、以前より匂宮を引き付けるようなそぶりを見せたので、女君の真意を知らない男はこの上なく愛着をそそられる。これは一種の媚態、演技であり、高貴な宮家の姫君にふさわしいものではない。ある意味で悪しき所行、好ましからざる言動ということにもなろう。無論、聡明さゆえの賢明な処世のあり様とも言えるが、かく主要人物たちの不穏な役割きはひとえに男君たちに限られるわけではないのである。多くの女君たちも程度の差こそあれ、陰に陽にそうした心内の病巣にふれられることも稀ではない。

源氏物語のなかに、多くは脇役、端役たちに、不当な役向きを担わされた、いわゆる悪役たちの存在が散見するが、長期的、短期的を問わず、それぞれ個性的、印象的描出が施され、物語の生成に續々寄与している。弘徽殿女御や式部卿宮の大北の方のような極め付きの悪役ぶりを発揮する者もあるが、末摘花の叔母や大井の旧邸の宿守、浮舟と左近少将の縁を取り持つ仲立ちなど、打算的な俗物ながらもどこか憎み通すことのできない、ふとほほえましさも看取される場合もある。弘徽殿太后すら晩年には源氏の威勢にははらしながら往時のわが前非を思いやつている。その中で式部卿の宮の大北の方だけは救いようもない感も否めないが、それとて加齢の極みに常軌を逸してよさがなさを露呈するあわれな道化の趣なしとも言えまい。

一方、こうした傍役たちのみならず、主要人物たちも内的、外的、それぞれに好ましからざる所為、言動が窺われるが、一概に男君に限られるわけでもない。人間である以上、完全無欠、聖人君子ぶりが完徹されるはずもなく、逆に理想的人物たちにも様々な綻びや傷がほの見えることも人間

らしさの証しとも言えよう。一人の人間の心内には善悪二様の人物が内在していると言われるが、その悪しき面が一時的にあるいは面的に強調されているのが傍役たちの場合であり、双方が共存しつつ見え隠れして造型されているのが、主要人物たちであろう。ここでは後者についてはわずかの事例しか触れなかったが、悪役ぶりを熟演しているのは源氏や匂宮、薫ばかりではない、あの内大臣はもとよりまめ人の名を取る夕霧等も例外ではないが、これらについては別稿を期したいと思う。

いずれにせよ、主要人物や脇役、端役を問わず、この種の役向きを演じながらも、極悪非道の限りではなく、何がしかの人間的情愛、血の通った、ふと失笑を禁じえないような場合が概ねであることも救いであろう。

*文中の引用本文は日本古典文学大系『源氏物語（一）～（五）』（岩波書店）による。

注（一）源氏が小君の手引きで空蝉のもとに忍んだとき、危機を察して身を隠した空蝉の後に残された継娘の軒端萩と出会うと、人違いと気づきながらも、「かの、をかしかりつる火影ならば、いかゞはせむ」におぼしなるも、悪き御心浅さなめりかし」へ空蝉・一一五〇とある。この少し前に空蝉と対座して碁を打っている軒端萩のあでやかな姿を思い出し、そのまま引き返すことができなかったのである。

（二）たとえば宇治の中君の場合である。本論二二頁参照。

（三）横笛の巻、一条御息所から柏木遺愛の笛を贈られた夕霧は、その夜自邸で皇女を得ながら不如意の気配のあらわであった柏木の心内を忖度しながら、自身と雲井雁との歩みに思いを馳せている。「わが御中の、うち気色ばみたる思ひやりも、なくて、睦びそめたる年月の程をかぞふるに、あはれに、いとかう、おしたちて、おこりならひ給へるも、ことわりにおぼえ給ひけり」へ六六〇。また、後日彼女が落葉宮の一件で突然実家の大臣邸に戻ったときも、「さればよ。いと、急にものし給ふ本性なり。このおとゞも、はた、大人くしうのどめたる所、さすがになく、いと、ひきゝりに、花やい給へる人にて」へ夕霧・一六三〇と父親ゆずりの性格に思いを馳せている。

また、宿木の巻で、薫の権大納言任官祝いが六条院の夕霧のもとで行われた時、招かれた匂宮が中君の出産が心配で途中で二条院に引きあげてしまうと、「おほい殿の御方には、『いと、飽かず、めざましう』と、のたまふ。劣るべうもあらぬ、御程なるを、たゞ今の思えの花やかさに思し驕りて、おし立ちもてなし給へるなめりかし」へ一〇九〇と、時の権力者夕霧の娘、六君の横暴ぶりが見えている。

（四）落窪物語の継母北の方は、道頼の画策で実の娘の四君が不幸な結婚をさせられ怨んでいたが、後に道頼が罪滅ぼしように良き再縁を授けてくれたことに非常に感謝している。しかし、さらに後年、再婚相手の男が遠国に榮譽の赴任となり四君も同行するとなると、道頼が母子の仲を引きさいたと逆恨みしている。

- (5) 乙女の巻の末に六条院造宮の記事があるが、その落成には紫上の父式部卿宮の五十賀の祝儀も視野に入れられていた。それを知った父宮は須磨時代に源氏を無視したことで、その後、宮家にはあまり彼の庇護は望めなかったが、しかし娘の紫上が北の方として大切にされていることを名誉に思ってきたが、又、「かく、この世にあまるまでひゞかし、営み給ふは、おぼえぬ齡の末の榮えにあるべきかな」と、よろこび給ふを、北の方は、心ゆかず、物しとのみおぼしたり。女御の御まじらひの程などにも、おとゝの御用意なきやうなるを、「いよ／＼うらめし」と、思ひしめ給へるなるべし」へ乙女・三二一と、夫の喜びぶりに比して、北の方の怒りは一通りではなかった。
- (6) 本論 第三章 六頁 参照
- (7) 拙稿『源氏物語の故人たち』（『静岡英和学院大学紀要』 第五号 平成十九年二月 後に『源氏物語の祈り』所収 平成二十二年 笠間書院）
- (8) 蓬生の巻には未摘花の兄の禪師の君が、源氏主催の桐壺院追善供養の法華八講に招かれ、その帰りに妹のもとを訪れている。ごくわずかな言及であるが、後に初音の巻にも、新春の挨拶に二条院東院の未摘花を訪れた源氏との会話のなかに一言ふれられている。寒そうな女君に厚着を勧めたとき、
「醍醐の阿闍梨の君の、御あつかひし侍りとて、衣どもゝ、え縫ひ侍らでなむ。かはぎぬをさへ取られにし後、さむく侍る」と、きこえたまふは、いと鼻赤き、御兄なりけり。
△初音・三八六△
- (9) 薫との縁を勧める乳母に北の方は「あな恐ろしや」と猛反対している。高貴な身分違いの男君との縁は不幸であるというのである。「……いかにも／＼、一心なからん人のみこそ、目安く、頼もしき事にはあらめ。わが身にても知りなき。こ宮の御有様は、いと、情／＼しく、めでたく、をかしうおはせしかど、人数にも思さゞりしかば、いかばかりかは、心憂く、つらかりし。この、いと言ふかひなく、情なく、様あしき人なれど、ひたおもむきに、一心なきを見れば、心やすくて、年頃をも、過ぐしつるなり。……」△東屋・一四五△
- (10) 拙稿『花散里の造型』（『源氏物語の美意識』所収 昭和五十四年 笠間書院）『花散里の君―虚心の愛』（森一郎氏編『源氏物語作中人物論』所収 平成五年 勉誠社）
- (11) 注7参照。
- (12) 斎宮女御に恋情を募らせながらも源氏が思い留まろうとする心意が次のように見えている。
これはいと似げなき事なり。（藤壺とのことは）恐ろしう、罪深きかたは、多うまさりけめど、いにしへのすきは、思ひやり少なきほどのあやまちに、仏、神も、ゆるし給ひけん。△薄雲・二四四△
- (13) 注12に同じ。
- (14) 母后の明石中宮も匂宮の所行には今上帝の手前もあり、常々胸を痛めている。たとえば、女房の大納言の君から薫の思い人の浮舟が匂宮とのことで宇治川に入水したらしいとの報を得たとき、

『さらに、かゝる事、又、まねぶな』と、いはせよ。かゝる筋に、御身をも、もてそこなひ、人にも、軽く心づきなき者に、思はれぬべきなめり』と、いみじう思いたり。

△嵯峨三二二△

また、その浮舟の存命が横川僧都により中宮や側近の女房、さらに薫の知るところとなると、中宮は匂宮の非行を恥じ入りながら薫に次のように語っている。

「聞えん方なかりける、御心の程かな」と、聞けば、まして、聞きつけ給はんこそ、いと、苦しかるべけれ。かゝる筋につけて、いと、軽く、憂き者にのみ、世に知られ給ひぬめれば、心うくなむ。△手習・四一三△

- (15) たとえば大君の訃報に久々に宇治に赴いた匂宮が中君と物越で対面したとき、「千々の社をひきかけて、行く先長きことを、契り聞え給ふも、『いかで、かく、口馴れ給ひけむ』と、心憂けれど」△総角・四六九△とあり、また、新婚の六君のもとから中君のもとに戻った匂宮が、自邸の気安さにほっとしながら「おろかならぬ事どもを、尽きせずのたまひ契るを、聞くにつけても、『かくのみ、言よきわざにやあらむ』と」△宿木・七八△等とある。

- (16) 秋山虔氏 『源氏物語の世界』 昭和三十九年 東京大学出版会

- (17) 匂宮と中君の不如意な結婚に戸惑いながらも、大君は内心匂宮の訪れを待っていた。そこで紅葉見物をかねて薫は匂宮を宇治に誘い、二人の再会を期したが、結局空振りに終わってしまったとき、大君の悲嘆は甚だしかった。

猶、音に聞く、月草の色なる御心なりけり、ほのかに、人の言ふを聞けば、男といふ物は、空言をこそ、いとよくすなれ。「思はぬ人を思ひ顔にとりなす言の葉、多かる物」と、この、人数ならぬ女ばらの、昔物語に言ふを、「さる、なほ／＼しき中にこそは、怪しからぬ心あるも、まじるらめ、何事も、筋ことなる際になりぬれば、人の聞き思ふこと、つゝましく、所せかるべき物」と、おもひしは、さしもあるまじきわざなりけり。

△総角・四三九△